

「ホームレス」とは誰か？ － 20 世紀初頭～ 1920 年代のシカゴにおける－

平 川 茂

「ホームレス」とは誰か？－現代のわれわれの「常識」では、それは「公園や河川敷、駅舎、路上などで寝る人々」をさす。これは、日本ばかりでなく、アメリカでもそうである。しかし 1970 年代までのアメリカでは、そうではなかった。本稿は、2つの報告書－A. Solenberger、*One Thousand Homeless Men*, 1911 と N. Anderson、*The Hobo*, 1923－の検討を通して、20 世紀初頭から 1920 年代までのシカゴにあって、「ホームレス」とはどういう人々であったのかを明らかにしようとするものである。この時期の「ホームレス」とは、大都市ならどこにでもある「簡易宿泊所密集地区内の格安のホテルに泊まっている単身男性」のことであった。そして彼らのなかに「ホーボー」、「トランプ」、「ホーム・ガード」、「バム」を区別することができた。「ホーボー」は「移動しながら、臨時的な仕事に従事する人々」であり、「トランプ」は「移動しても、仕事はしない人々」であり、また「ホーム・ガード」は「ホーボーヘミア（シカゴの簡易宿泊所密集地区）に居ついて、雑多な仕事をする人々」であり、「バム」は「ホーボーヘミアに居ついていても、仕事はしない人々」であった。これらのうち「バム」を除けば「格安のホテルに泊まる」ことができた。「バム」は、そうすることができず、野宿を強いられた。しかし数の上で「バム」はマイノリティであったので、「野宿」が＜問題＞とみなされることはなかった。20 世紀初頭から 1920 年代までのシカゴにあって、「ホームレス」問題とは、あくまで「格安のホテルに泊まることができた単身男性」の問題だったのである。

キーワード：ホーボーヘミア、ホーボー、トランプ、ホーム・ガード、バム

はじめに

筆者は以前、アメリカにあって同じく「ホームレス」と呼ばれていても、その特徴が 1980 年頃を境として、その前後で大きく異なっていることを明らかにした [平川、2003]。今その違いを表にすれば次のようになる。

表1 アメリカにおける「オールド・ホームレス」と「ニュー・ホームレス」の比較

	オールド・ホームレス (1920 年代～ 1970 年代)	ニュー・ホームレス (1980 年代以後)
生活スタイル	貧しかったが、多くは格安のホテル（簡易宿泊所）に泊まることができた	格安のホテル（簡易宿泊所）に泊まれなくなって、路上で寝たり、シェルターに入所
健康状態	アルコール依存、身体障害、精神障害が顕著（とくに 1950～70 年代）	アルコール依存、精神障害、薬物依存がきわめて深刻
性別・婚姻の有無	ほとんどが単身の男性	子どもを連れた女性を含めて女性が 3 割強を占め、単身男性の割合は 6 割強
人種・年齢	ほとんどが白人。第二次世界大戦後、高齢化	白人と黒人がともに 4 割、ヒスパニックが 1 割。30～40 代が多数

当時は表の左欄と右欄にある特徴づけをそれぞれ「スキッド・ロウのホームレス生活者」・「今日のホームレス生活者」と表現したが、たとえ「スキッド・ロウの／今日の」という表現であれ、「オールド／ニュー」という表現であれ、とにかく 1980 年ごろを境にして、その前後での「ホームレス」のあり方を区別しようとしても、いくらかの違和感が残る。なぜなら「貧しかったとはいえ、多くは格安のホテル（簡易宿泊所）に泊まることができた」人々を－「スキッド・ロウの」とか「オールド」という限定はあるにせよ、とにかく－「ホームレス」とみなすことは、現在のわれわれの「常識的なホームレス理解」からすれば、かなり無理があるように思われるからである。われわれの「常識」は「格安のホテルに泊まる」人々を「ホームレス」とみなすことに抵抗する。というのは、われわれが現在「ホームレス」という言葉によって思い浮かべるのは、「公園や河川敷、駅舎、路上などで寝る人々」であって、簡易宿泊所などの「格安のホテルで寝泊りする人々」ではないからである。

では、「オールド・ホームレス」の多くは、なぜ「貧しかったとはいえ、格安のホテルに泊まることができた」のだろうか。筆者は「なぜなら、不況期を除けば、多くはなんらかの臨時的仕事に従事して、宿泊費を含む最低の生活費を得ていたからである」と述べた。しかし当時は「なんらかの臨時的仕事に従事した」のがどんな人々だったのかを明らかにするところまで議論を深めることができなかった。

その後、アメリカの「ホームレス」の歴史に関する文献をいくつか読み進めるにつれて、1970 年代ごろまでのアメリカにあって「ホームレス」と呼ばれた人々が、現在のわれわれが「ホームレス」とみなす人々とかなり異なっていることがわかってきた。

本稿は、「オールド・ホームレス」－とりわけ 20 世紀初頭から 1920 年代までの－とはどのような人々であったのかを明らかにしようとするものである。その際、依拠するのは、1911 年に出版された A. Solenberger の *One Thousand Homeless Men: A Study of Original Records* と 1923 年に出版された N. Anderson の *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man* である。

1. 2つの報告書

One Thousand Homeless Men は、1900 年当時、シカゴの民間慈善団体（Chicago Bureau of Charities）の一支部－中央ビジネス地区（「ループ」）の周囲に広がる簡易宿泊所密集地区内にあった－を統括していた A. Solenberger が中心となって、1900 年から 1903 年までの間、当慈善団体に援助を求めてきた人々の中で“homeless man”とみなされた人 1000 名に対してなされた調査をまとめたものである。

Solenberger は当地区で働くうちに、彼女自身が属する慈善団体をはじめとして、さまざまな組織や機関が“homeless man”について十分な知識をもたないままで対処していることに疑問を抱くようになった。そこで彼女は、“homeless man”が現在置かれている状態および彼らが“homeless man”になった事情、さらには彼らに対してこれまでなされてきた処遇の帰結を明らかにするために調査を行った[Solenberger, 1911, p.3]。調査は、当慈善団体の職員ばかりでなく、警察や簡易宿泊所の協力も得て行われた [ibid., p. VIII]。Solenberger は、1903 年には当慈善団体を退職したが、その後も、調査対象者の追跡調査を行った。調査の分析を終え、後は「前書」

と「結論」を書くだけという時点で(1910年)、彼女は亡くなった。*One Thousand Homeless Men* は、彼女の死後、出版されたものである [ibid., p. VII]。

Solenberger は、調査の分析にあたって、調査対象である “homeless men” を次の7つのカテゴリーに分けた。すなわち「身体に障害をもつ者」、「精神に障害をもつ者および知的な障害をもつ者」、「高齢者 (60 歳以上)」、「季節労働者」、「物乞い」、「《トランプ (放浪者)》」、「家出少年」である。そして各カテゴリーを年齢、出生地、婚姻の有無、教育程度、健康状態 (身体と精神) などのデータに基づいて分析した。こうした Solenberger の調査は「規模が大きかったのと分析手法が体系立っていた点で、アメリカ最初の本格的なホームレス調査」とみなされている [Shinn and Fischer, 2004, p.475]。

なお Solenberger のいう “homeless man” とは、「自分が生まれた家族を離れた後も、いまだ別の家族をつくっていないすべての男性」のことをいう [Solenberger, 1911, p.3]。言い換えれば、「定位家族」を出た後も、いまだ「生殖家族」を形成していない男性はすべて “homeless man” ということになる。したがって、たとえ一戸建ての家 (賃貸ではない) に住んでいようと、高級ホテルに宿泊していようと、また簡易宿泊所などの格安のホテルに宿泊していようと、とにかくそこに一人で住んでいる男性はすべて “homeless man” ということになる。Solenberger のいう “homeless man” とは、現在の世帯分類でいえば「単独世帯」の男性ということになるだろう。しかし一戸建ての家 (賃貸ではない) に住んでいたり、高級ホテルに泊まっている男性で、慈善団体に援助を求めるような人は、ふつう考えられないから、Solenberger のいう “homeless man” とは、シカゴのような「大都市ならどこにでもある簡易宿泊所密集地区内の格安のホテルに泊まっている单身男性」ということになる [ibid., p.3]。

他方、*The Hobo* は、1921 年にシカゴ大学大学院に入学した N. Anderson が、入学後半年ほどしてから手がけた、シカゴの簡易宿泊所密集地区 - 先の Solenberger の調査対象者が住んでいたのと同じ地域であり、当時は「メイン・ステム」とか「ホーボヘミア」と呼ばれていた - に住む人々を対象にした調査をまとめたものである。Solenberger の調査手法が量的なものであったのに対して、Anderson のそれは参与観察を基本とした質的な調査であった。

大学院入学後半年ほどして、Anderson は、当時ホーボヘミアの有力者だった医師 B. Reitman の講演を聴きに行った。その講演はシカゴの「ホームレス」を扱ったものであった。講演の後、Anderson が質問したことがきっかけになって、彼は Reitman と知り合いになった。Reitman は、Anderson が 17 歳のときに (1906 年) 生家を出てから、32 歳でシカゴ大学大学院に入学するまでの間、おもに中西部の建設現場を移動しながら働く「渡り労働者」だったことを知る [Anderson, 1975, pp.162-3]。ただし、Anderson が 17 歳で生家を出たといっても、彼は音信を絶やすことはなかったし、仕送りもしていた。また、父親が亡くなったときも含めて 3 回は家に帰っていた。また 22 歳からはユタ州ソルトレイク・シティにあった高校に入学していた。学費は、おもに学校が休みの時期に、なじみの業者のもとで大工として働いて稼ぎ出した。そして、26 歳になると、高校と同じ系列の大学に入学して、経済学と社会学を勉強していた [ibid., pp.126-38]。

Reitman の推薦を受けて、「ホームレス問題検討委員会 The Committee on Homeless Men」 - 当時シカゴにあった 11 の民間慈善団体の代表から成るもので、委員長はシカゴ大学社会学部教

授の E. Burgess であったーは Anderson に、ホーボヘミアの「ホームレス」調査を依頼することになった。調査は、ホーボヘミア内の簡易宿泊所の 1 室に住み込んだ Anderson がほぼ一人で、およそ 1 年かけて行った [Anderson, 1923, p.XX VII]。

Anderson は 1889 年にシカゴのホーボヘミアで生まれた。父親はスウェーデンの農家出身で、14 歳のときドイツに渡り、そこで 16 年間働いた後、1882 年にアメリカに来ていた。結婚するまでの 5 年間、彼は中西部や西部を放浪した。母はスコットランド系アメリカ人の子で、父と出会ったところはセントルイスのソーセージ工場で働いていた。両親は結婚生活をシカゴのホーボヘミアで始めた。そこはアメリカに渡って来た父親が最初に住んだ街であった [Anderson, 1975, pp.1-3]。

Anderson が生まれてまもなくして、一家はそこを離れ、1902 年にミシガン州のある村に落ち着くまで、幌馬車で、中西部と西部を転々とした。その間、一家はもう一度シカゴに戻ってきて、ホーボヘミアに隣接する借家で暮らした。それは、1899 年から 91 年までの 2 年間であった。Anderson は、小学校（1 年生）を 2 ヶ月でやめると、一歳年長の兄と一緒にホーボヘミアで働きだした。兄は靴磨きをし、Anderson は新聞売りをして家計を助けた。Anderson はまた、売春宿の女性たちの使い走りをして小遣いを稼いだりもした。それゆえ、ホーボヘミアは彼にとって「よく読みこんだ本」のように、なじんだ場所になっていた [ibid., pp.22-4]。

1 年かけて、Anderson は 60 人のホーボヘミア住民からライフ・ヒストリーを聞き取ると同時に膨大な量の資料を収集して、それらを基に報告書を書き上げた。Anderson には、報告書を本にして出版する意図はまったくなかったが、報告書をシカゴ大学の E. Burgess -彼は「ホームレス問題検討委員会」の委員長であったーから読ませてもらった R. Park は、その報告書を高く評価し、出版することにした。こうして、この報告書は 1923 年に世に出ることになったのである [ibid., pp.165-9]。

The Hobo の評判は上々であった [ibid., p.170]。それが高い評価を受けたのは、Anderson が、10 歳から 11 歳にかけてホーボヘミアで働いていて、研究対象となった地域とその住民になじみがあったのに加えて、17 歳で生家を出て以後、各地の労働現場でさまざまな仕事をして、ホーボヘミアの住民と労働経験をかなり共有できていたおかげで、調査対象を、いわば内側からーつまり調査対象者自身のものの見方に自覚的にー理解することができていたからであろう。

これに対して、Solenberger の場合、その調査対象者に関する理解は、外側からのーつまり調査対象者自身のものの見方に無自覚なーものにとどまっていた。例えば、彼女は、『《トラムプ(放浪者)》をなくす」最善の方策として、彼らを「強制的に入所させる農場」の創設を提案しているが、その「農場」たるや、「入所期限の定めはなく、入所者に労働規律を叩き込んだうえで、職業訓練をする施設」なのであった [Solenberger, 1911, p.237]。

また、後で見るように、Anderson は“homeless man”をく移動の有無（移動するか、しないか）>とく労働の有無（働くか、働かないか）>という 2 つの基準を使ってタイプ分けしたうえで、それぞれを、対象者のライフ・ヒストリーを用いて特徴づけていた。

これに対して、Solenberger の場合、慈善団体に援助を求めてきた者だけを対象にするという調査の性格上、1,000 名の“homeless men”のなかで、とりわけ働けない者（「身体に障害をもつ者」、

「精神に障害をもつ者および知的な障害をもつ者」、「高齢者」、「物乞い」、「家出少年」の占める割合が大きくなった（合計 55.9%）。その結果、分析の力点も、これらの働けない者に置かれることになった。しかしながら、後で見るように、20 世紀初頭から 1920 年代までのアメリカでは、“homeless men”の主力は、働ける（働く能力のある）人々だったのである。

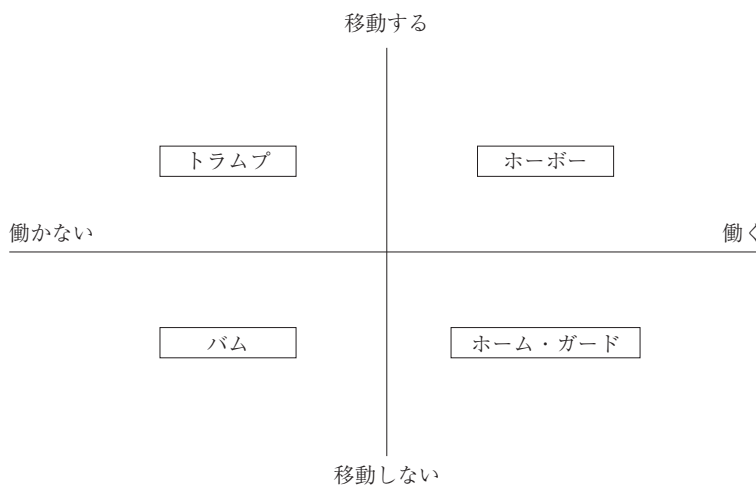
こうした事情から、以下の考察では、とりわけ Anderson の *The Hobo* を重視することにする。

2. ホーボーとトランプ

Anderson は「ホームレス」についての議論を始めるにあって、Solenberger の議論を参照している。先に見たように、Solenberger は「大都市ならどこにでもある簡易宿泊所密集地区内の格安のホテルに泊まっている单身男性」を“homeless man”とみなしたが、Anderson もこの見解を踏襲している。すなわち「ホーボヘミアに住んでいる人たちをさす言葉として、『ホームレス homeless man』という言葉ほど適切なものはない」[Anderson, 1923, p.87]。そして、ただちに“homeless man”の類型に関する議論に向かう。

Anderson は、“homeless man”のなかに「ホーボー hobo」、「トランプ tramp」、「バム bum」、「ホーム・ガード home guard」と呼ばれる人たちを区別している。「ホーボー」は「移動しながら、臨時的工作に従事する人々」であり、「トランプ」は「移動しても、仕事はしない人々」、また「ホーム・ガード」は「ホーボヘミアに居ついて、雑多な仕事をする人々」であり、「バム」は「ホーボヘミアに居ついていても、仕事はしない人々」のことである。このような特徴づけの仕方にかがえるのは、Anderson が“homeless man”の類型分けを行うにあたって、＜移動の有無＞と＜労働の有無＞という 2 つの軸を組み合わせていることである。今それを図示すれば、以下のようになるだろう。

図 1 「ホームレス」の 4 類型



Anderson はホーボーとトラムプを明瞭に区別しているが、実はこうした区別は、1920 年代になってなされるようになったのであって、それ以前はそれほど一般的ではなかった。むしろ、ホーボーとトラムプはともに「移動する」点で共通していることから、両者を区別しないで《トラムプ》として一括する見方が支配的であった。

Solenberger もまた、ホーボーとトラムプを区別しないで、《トラムプ》として一括していた。彼女によれば、《トラムプ》の本質は「放浪すること」にあった。すなわち「ほんとうのトラムプとはどういう者か—その決め手となる特徴は、放浪にある。施しを請うか、請わないかとか、働くか、働かないかといったことなどは、彼がトラムプであるかどうかの決め手にはならないのである」[Solenberger, 1911, p.215]。ここでいう「放浪」とは、何らかの明確な目的と目的地があつて、そのために、そこをめざして移動するようなものではない。あくまでも、移動の目的と目的地は、その時々となりゆきによって決まるのが「放浪」であり、そのことを自覚しているのが「ほんとうのトラムプ」なのである。それゆえ、Solenberger が強調するように、「季節労働者」—何らかの目的と目的地を明確にしたうえで移動する—は、《トラムプ》ではないことになる [ibid., p.210]。

この「放浪」がどのようなものであるか—いわば「放浪の仕方」—に基づいて、Solenberger は《トラムプ》を次の3つの類型に分けている。すなわち①「絶えず放浪する者」、②「季節に応じて放浪する者」、③「突発的に放浪する者」。

①「絶えず放浪する者」。Solenberger は、その例として、慈善団体にやって来て、セント・ポールまでの運賃を工面してくれることを望んだ、耳の聞こえない若者を挙げている。その若者は、セント・ポールに何のあてももっていないことがわかったので、Solenberger たちは依頼を断った。すると若者は別の町までの運賃を望んだ。それも断ると、彼は「西部の町ならどこでもいいから、とにかく一刻も早くどこかへ行きたい」と書いた（筆談）。シカゴに到着してからまだ3時間も経っていないにもかかわらず、彼は「僕はどこかに行かなくてはならない。とにかくここにはいたくない」と主張した。Solenberger によれば、彼のようないわば「放浪の情熱にとり憑かれた者」は、強制的に病院に入れられるか、何らかの矯正施設に入れられるかでもない限り、放浪をやめることはない [ibid., pp.218-20]。

②「季節に応じて放浪する者」。このなかには、(a) 冒険を求めて家出してきた少年たち、(b) 冬の間は簡易宿泊所で寝泊りしていて、春の到来とともに、どこかに行く者、(c) 冬の間は宗教団体や市営のシェルターに入所しているが、春になると、どこかへ行く者が含まれる [ibid., p.220-21]。確かに Solenberger は、(b) のなかに、春の到来とともに、多くは貨物列車にタダ乗りして、各地の農場や鉱山、建設現場などに働きに行く者がいることを明示してはいない。しかし、これは彼女が《トラムプ》の類型分けを「放浪の仕方」に基づいて、していたからであつて、たとえ明示されていなくても、こうした「放浪しながら働く、あるいは働きながら放浪する」者—Anderson のいうホーボー—が(b)のなかにいることは充分考えられる。

③「突発的に放浪する者」。数ヶ月か数年、ある場所に定着して暮らしていた人が、ある日、突然「放浪の情熱」に捉えられて、家族や財産、責任を放棄して放浪し始める。Solenberger によれば、こういう人が求めるのは「責任からの解放であり、新奇さであり、『路上』の生活の

さまざまな魅力」である [ibid., pp.221-22]。

なお、これらの《トラムプ》に該当すると判断された者は220人であった。Solenbergerは、年齢、出生地、婚姻の有無とならんで、これらの人がどの程度自らの稼ぎで生活しているかをも調べている(表2参照)。それによれば、「自活にはほど遠い」者が96名、「おおむね自活できている」者が77名、「不明」が47名であった。「おおむね自活できている」者は、当然何らかの仕事をしていると考えられる。Solenbergerは「物乞い」を《トラムプ》に含めていないから、ここでいう「仕事」は、ほとんど「臨時的な仕事」ということになるだろう。Solenbergerによれば、《トラムプ》のなかでも「おおむね自活できている」者は、ある現場で「1週間か2週間、あまり重労働ではない仕事をやっては、またそこを出て、稼いだ金がなくなるまで放浪する」[ibid., p.224]。

表2 自活の程度

おおむね自活できている	77
自活にはほど遠い	96
不明	47
合計	220

出所：[Solenberger, 1911, p.216 の Table X (一部)]

Solenbergerが、放浪しながら働く者も働かない者も《トラムプ》として一括したのに対して、Andersonは両者を峻別する。彼は「放浪しながら働く者」を「ホーボー」とみなし、「放浪はするが、働かない者」を「トラムプ」とみなした。

ホーボーとは厳密に言えば、渡り労働者のことである。彼らは工場であれ、作業場、鉱山、農場であれ、とにかく自分にとって都合がいいところならどこであれ働く。その際、時期や季節のいかんは問わない。彼らの活動範囲は国中に及んでいる。国境を越える者も多い。彼らは仕事から仕事へとアメリカ大陸を横断する。さまざまな産業で働く能力がある者もいる。高度な熟練を身につけている者もいるし、専門的な知識をもっている者さえいる。確かに仕事が途切れたときには物乞いに身をやつすこともあるとはいえ、ホーボーの生活は基本的に労働によって支えられている。そして、このことがホーボーをホーボーたらしめているのである [Anderson, 1923, p.91]

しばしば「トラムプ」という言葉は、ホームレスのなかでも、とりわけ移動する人たちを十把一絡げにするものとして使われるが、ここではホームレスのなかのある特定の集団をさすものとして「トラムプ」という言葉を使用する。その実態に精通した人たちの見解によれば、「トラムプ」とは、国中を回って、いろいろな経験をしてみたいという強い願望をもった人々のことである。彼らは「いろいろ工夫して何とかやっていくことができる」すぐれた技量の持ち主である [ibid., pp.93-4]。

フロンティア開発が本格化した1860年代以後、西部や中西部では農業や林業、鉱業、土木・

建設業などの分野で短期の臨時的な労働に対する需要が著しく増大した。この需要に応じて各地の農場や林野、鉱山、原野などを移動しながら、種々の農作物の収穫、木材の伐採、石炭・鉄などの採掘、鉄道・道路・橋梁・建物などの建造・建設に従事したのが、ホーボーであった。

彼らはもっぱら鉄道を利用して移動した。たいていは貨物列車に無断で乗り込んでの移動であった。仕事に区切りがついて、ある程度の蓄えができると彼らは再び貨物列車に乗り込んだ。彼らがめざしたのは鉄道交通の要衝にある都市であった。これらの都市には例外なくその中心部の一角に、ホーボーをはじめ、さまざまな臨時・日雇の仕事に従事する人々などが滞在する地区があった。その住人たちによって、そこは「ステム」とか「メイン・ステム」などと呼ばれた。

ホーボーたちの集住地区として、ステムが形成され始めたのは1870年代ごろからである。そのなかでもとりわけ大規模なものが見られたのがシカゴであった。なぜなら、そこは当時アメリカ最大の鉄道の中心地だったからである。各都市のステムはそれぞれ特有の呼び名をもっていたが、シカゴのそれは「ホーボヘミア」であった [Monkkonen, 1984., Hoch and Slayton, 1989., Kusmer, 2002., Depastino, 2003.]。

放浪しながら働くことによって生活を維持しているホーボーは、当然のことながら定着を望まない。ホーボーたちの間には、一箇所にとどまって同じ仕事を長く続ける者を「守銭奴」として見下す傾向があった。それゆえ、たとえ今やっている仕事が恵まれた条件のものであっても、短期間でそこをやめて別のところに行くことになる。Andersonによれば、ホーボーがそうした行動に出るのは、自分が雇用主に依存することを潔しとしない「独立心」の持ち主であることを示したいからであり、また別のところで別の仕事を経験したいからでもあった [Anderson, 1923, p.74]。

ただし Anderson が挙げている「ピート」というホーボーのケースを見れば、定着を望まないという「ホーボー哲学」には、定着を拒否することによって労働条件の悪さや雇用主の悪質さに抗議するという面もあったことがわかる。

ピートはこれまで条件のいい仕事をたくさんしてきたが、いつも何か彼の気に食わないことが出てきて、しまいにはやめることになった。それほど以前のことでないが、ある現場では、もっととどまるように勧められた。しかし、その粉塵のひどさにがまんできなくなってやめてしまった。別の現場では、他の点では恵まれていたが、雇用主が無礼で、彼や他の労働者に対して乱暴な言葉使いをするので、やはりそこをやめた。ピートが言うには、「俺たちは、そんな男のために働いてはいけない」。別の現場では、雇用主が一方的に—まるでアメリカ市民はこうすべきだと命令できる権利が、自分にあるかのように—ピートたちに、ある慣習をやめるように言ったので、そこをやめることにしたという [ibid., p.75]。

なお Anderson は、季節ごとに決まった現場に行って、同じ仕事に従事する季節労働者を、収入が安定し先の見通しも立ちやすいという理由から、「ホーボーのなかでも上位に位置する者」とみなしていた [ibid., p.89]。

ホーボーにとって「放浪すること」と「働くこと」はともに重要であった。それに対して、トラムプにとって魅力があったのは「放浪すること」それ自体であった。トラムプはホーボーのように、いろいろな産業で種々の労働に従事することはなかった。彼らにとって、労働は糊口をしのぐための手段にすぎないのであって、「当面なんとかやっていく」ための収入が得られれば、どんな仕事でもよかった。彼らはホーボーのように肉体労働に誇りをもつことはなかった。Anderson が挙げている「X」は、そうしたトラムプの典型である。

X は孤児同然のような状態で生まれた。しばらくして里子に出され、オハイオ州からサウス・ダコタ州に移った。10 歳を過ぎると、彼は親に反発するようになった。そして家を出た。それ以来—ほんのわずかの間、家に戻っていた時期があったが、それを除けば—ずっと家に帰ることはなかった。今や 45 歳を過ぎてしまった。彼はいろいろなところに行ったが、その間、肉体労働に従事するということはほとんどなかった。もっぱら小話を載せた本や歌詞集を売って食べていた。時には家々を回って小物を売ったこともあった。数年前には、自分で経済学の小冊子を書いて数千部を売った。1921 年から 22 年にかけての冬は、月刊の『ホーボー・ニュース』(1) という新聞を売っていた。今まで彼は、こうして生きてきたのである [ibid., p.94]。

Anderson は、ホーボーとトラムプを明確に区別した。しかし実際には両者の境界はそれほど強固なものではなかった。高齢になったり、病気やケガで働けなくなれば、ホーボーは容易にトラムプの地位に移行した。しかし、なかにはトラムプとして生きていくこともかなわなくなるホーボーもいた。そうになると彼は、簡易宿泊所密集地区を出ることもできなくなり、そこで生きていくしかなかった。Anderson が挙げている「M.P.」は、もとは腕のいい左官であったが、50 歳を過ぎて「放浪するのが億劫になった」ので「今はあまり移動しないのでできる仕事をするようになった」。

「M.P.」はこの一年、シカゴを出ないで、もっぱら左官の仕事をしていた。今はホーボヘミアに住んでいて、2～3 日の稼ぎでなんとか 2～3 週間食いつないでいる。時には、1 週間以上仕事をしないこともある [ibid., pp.91-2]。

3. ホーム・ガードとバム

働くか、働かないかの違いはあるにせよ、ホーボーとトラムプが各地を放浪するのを常とするのに対して、簡易宿泊所密集地区からほとんど外に出ないのがホーム・ガードとバムである。両者の違いはといえば、仕事をするか、しないかにあった。

ホーム・ガードは、ふつう熟練を要しない雑業的な仕事をした。そして、その収入でなんとかやっていける限り、慈善団体の世話になることはない。しかし仕事を見つけるのが困難な冬になると、そうもいっておれなくなる。例えば、Anderson が挙げる「L.E.」は、母親の死後、父親との折り合いが悪くなって、家を飛び出して、直接ホーボヘミアにやってきた 23 歳の若

者であるが、1921 年から 22 年の冬は、御者としての仕事がなくなったので、ある宗教団体のやっかいになった。そして、それ以来、お金がなくなると宗教団体にやってくるようになった [ibid., pp.96-7]。

Anderson は、ホーム・ガードとしてもう一人「ショーティ」のケースを挙げている。彼はまだ宗教団体の世話にはなっていないが、その生活は「L.E.」と同じく不安定きわまりない。「ショーティ」は、結婚していたわずかの時期を除いて、39 年間ずっとホーボヘミアで生きてきた。結婚は酒が原因でだめになっていた。彼は、今でも酒を飲んでトラブルを引き起こしている。1922 年の夏には何回か警察のやっかいになった。若い頃は家畜置き場(ストック・ヤード)で安定した仕事をしていた時もあったが、今では時々半端仕事をして「何とかやっている」[ibid., p.97]。

「ショーティ」や「L.E.」は、ホーボヘミアで暮らすようになってから、ほとんどそこを出なかったのに対して、かつてはホーボーやトラムプとして放浪していたが、何らかの理由でホーボヘミアにとどまるようになった者もいる。先に見た左官の「M.P.」は、かつてホーボーであったが、高齢になったので放浪をやめてホーボヘミアで暮らすようになっていた。

雑業的な仕事すらしなくなって、もっぱら「物乞い」などで「何とかやっている」のがバムである。Anderson が挙げている「A.B.」はその典型である。彼は 32 歳で、アルコール依存である。かつてはベリー摘みや皿洗い、行商などをしていた。今は「物乞い」をして何とか食べていけるから、宗教団体の世話にならずにすんでいる [ibid., pp.98-9]。

他方、「物乞い」を含めて、ほとんど仕事をしないで、冬の間は宗教団体の施設で寝て、暖かくなると戸外で寝る者もいた。「L.D.」がそうである。いま 45 歳の彼は、若い頃はプロのボクサーだった。その後、あちこち放浪したが、いつも酒を手放すことはなかった。冬はいつも宗教団体の宿泊施設にいた。春になるとそこを出て、野宿した。夏はたいてい港で眠った。かつて彼は時々そこで貨物船の荷下しの仕事をしていたのである [ibid., p.98]。

Anderson は、バムを「ホームレスのなかで最も絶望的で、救いがたい者」とか「最も惨めで、最も嫌悪すべき者」と形容しているが、これはホーボヘミアの住民も含めて、当時の世間一般に見られた評価であった [ibid., p.98]。バムは「ホームレス」の中で最も下に位置するとみなされていたのである。しかしバムとホーム・ガードの境界もまた、それほど強固であったわけではない。後者は、何らかの事情があれば—例えば高齢や、病気、ケガなど—容易に前者に移行することになる。先に見たホーム・ガードの「L.E.」にせよ、「ショーティ」、「M.P.」にせよ、今は何とか働けているのでホーム・ガードの地位にとどまっていられるが、働けなくなれば、すぐにバムとなるだろう。

4. 「ホームレス」とは誰か？

Solenberger と Anderson にとって、「ホームレス」とは「いまだ(生殖)家族を作らないで、簡易宿泊所密集地区内の格安のホテルに泊まっている男性」のことであった。われわれは、両者が「ホームレス」を「格安のホテルにさえ泊まれなくなって、戸外で寝るしかなくなった単身男性」ではなく、あくまでも「格安のホテルに泊まっている単身男性」とみなしていること

に注目しなくてはいけない。今のわれわれと違って、両者は「ホームレス」を「野宿者」とはみなしていないのである。

では、なぜ「ホームレス」は結婚しないで、ホテル暮らしをしたのか。

20世紀初頭から20年代にかけて、アメリカは産業基盤の整備や農業をはじめ鉱業、林業などの分野で大量の臨時的な労働力を必要としていた。この旺盛な労働需要に応えたのが、ここでいう「ホームレス」であった。必要とされたのは、広大な地域に散在する現場での臨時労働であったから、仕事を得ようと思えば、いきおい放浪を常とせざるをえなかった。それゆえ彼らは結婚しないで、ホテル暮らしをしたのである。

Solenberger の場合、このような「ホームレス」の典型が《トラムプ》であった。それは慈善団体に援助を求めた人1,000名のうち220名(22.0%)であった。残りは「物乞い」135名(13.5%)、「高齢者」132名(13.2%)、「家出少年」117名(11.7%)、「季節労働者」91名(9.1%)、「精神に障害をもつ者および知的な障害をもつ者」89名(8.9%)、「身体に障害をもつ者」86名(8.6%)、「その他」247名(24.7%)であった。

ここで注意しなければならないのは、この数字は、あくまでも慈善団体に援助を求めてきた人の数であるということである。つまり、この数字の中には慈善団体に援助を求めなければならないほど困っているわけではない人は含まれていないと考えられる。したがって、この数字は、調査時点でのシカゴにおける「ホームレス」人口全体に占める、それぞれのカテゴリーの割合を正確に反映するものではないだろう。調査対象者1,000名に占める《トラムプ》の割合22.0%という数字に関して言えば、それは実態－シカゴの「ホームレス」人口全体に占める《トラムプ》の割合－よりも小さくなっていると考えられる。当時のシカゴには、援助を求めて慈善団体を訪れる必要のない《トラムプ》が多数いたはずである。実際、Solenberger は、K. Edmond が1908年に出版した、*The Elimination of The Tramp* という本に依拠して、当時の全米の《トラムプ》人口が50万にのぼると見ていた [Solenberger, 1911, p.214]。(2)

こうした膨大な数にのぼると見られた《トラムプ》の中身に関して、Solenberger はあまり詳しく検討しなかった。これに対して、Anderson は「ホームレス」のなかに「ホーボー」、「トラムプ」、「ホーム・ガード」、「バム」を区別し、それぞれどういうものであるかを明らかにした。

シカゴにおける各カテゴリーの人口について、Anderson は次のように推定している。すなわち、ホーボー1万人、トラムプ5,000人、ホーム・ガード3万人、バム2,500人。この推定は、ホーボヘミアとその周辺にあった格安のホテルの収容能力からそれほどかけ離れてはいない。

シカゴにある700軒のホテルのうち、そのほぼ5分の1が渡り労働者向けのホテルである。この調査の一環で訪問した63のホテルの総収容能力は1万5,000人であった。ここから推し量ると、ホーボヘミア内にあるホテルの総収容能力は2万5,000人から3万人であるといえる。周辺の格安のホテルも、同じくらいの収容能力があると推定できる [Anderson, 1923, p.14]。

ここからホーボーとトラムプが、主に「渡り労働者向けのホテル」に宿泊し、ホーム・ガードが「周辺の格安のホテル」に宿泊していると想定できる。

ではバムはどうか。おそらく多くは格安のホテルにも宿泊できず、野宿を強いられていたであろう。Anderson は、いま引用した部分に続けて「これ以外に数千の男たちが港、船内の機関室、空き家、宗教団体の宿泊施設で寝ている。夏には公園で寝る者もいる」と書いているが、これらの男たちのほとんどはバムであると見ることができる。

「数千の男たち」が野宿していたにもかかわらず、彼らは、まずもって対策を講じられるべき<問題>とみなされてはいない。「数千」という、あいまいな表現自体が、いまだ野宿者が<問題>とされていないことを如実に物語っている。では、なぜ野宿者は<問題>ではなかったのだろうか。

端的に言えば、野宿者はまだ数の上で少数だったからだろう。いま見た、Anderson による「ホームレス」人口の内訳の推定に基づけば、野宿者数は 2,000 人から 3,000 人と考えられる。シカゴの「ホームレス」人口に占める割合で言えば 4% から 7% ほどである。そうしたとき、野宿者が「ホームレス」人口を代表するものとみなされることはないだろう。野宿者は、「ホームレス」というマイノリティの、さらにマイノリティであるがゆえに、<問題>となることはなかったのであろう。

野宿者のこうしたあり方は、1970 年代の終わりごろまで続いた。このころから、格安のホテルにさえ泊まれなくなって路上で寝る人々（単身の男性だけではなく女性、とりわけ子どもを連れた女性）が目につくようになった。そして 1980 年代になると、それはいっそうはなはだしくなった。その結果、野宿者が対策を講じるべき<問題>となったのである。これ以後、「ホームレス」とは野宿者をさすようになり、現在もそうになっている。こうして「ホームレス」とは野宿者であるという見方が「常識」となったのである。

おわりに

「オールド・ホームレス」とは、「格安のホテルに泊まっている単身男性」のことであった。他方「ニュー・ホームレス」とは、「路上で寝る単身男性や既婚女性」のことであった。P. Rossi は前者を“familyless”、後者を“shelterless”と命名しているが、こうした命名の仕方は、両者の特徴をきわめて的確に表現するものである [Rossi.1989, p.34]。

「オールド・ホームレス」と「ニュー・ホームレス」を比較したとき、前者はまだ格安のホテルとはいえ泊まるところがあっただけ、後者より恵まれていたと考えられないわけではない。しかし「オールド・ホームレス」は、結婚して家庭生活を営むことはできなかった。もちろん、その背後には、次のような貧困以外の要因が考えられた。すなわち、そもそも仕事を得ようと思えば、各地の労働現場を移動しなくてはいけなかった。また、彼らのなかには一箇所に定着して家庭生活を営むよりも、単身での放浪を好む傾向も見られた。確かに、こうした事情があったとはいえ、「オールド・ホームレス」を“familyless”の状態に押しとどめた最大の要因はやはり貧困であっただろう。彼らが格安のホテルに泊まれたのは、仕事に恵まれたときだけであって、景気が悪くなったときはもちろん、病気になったり、けがをしたりしたら、とたんに格安のホテルにすら泊まれなくなった。こういう不安定きわまりない生活をしている者にとって、結婚して家庭生活を営むことなど、とうてい望めなかっただろう。

他方“shelterless”としての「ニュー・ホームレス」といえば、その貧困のはなはだしさはいうまでもない。彼らには格安のホテルに泊まる家賃を捻出するだけの臨時労働の機会さえない。望みがあるとすれば、せいぜい公営もしくは民営の宿泊施設（シェルター）に入ることくらいである。ところで、この宿泊施設（シェルター）こそは、時代は異なるとはいえ、あの「オールド・ホームレス」たちでさえ、プライバシーが保たれないという理由で最も忌避したものであった。したがって、そうした宿泊施設（シェルター）に入るしかない状態に置かれた「ニュー・ホームレス」の方が、「オールド・ホームレス」より一層ミゼラブルであるといえよう。

しかし「オールド・ホームレス」と「ニュー・ホームレス」の貧困の程度を比較して、どちらがよりましか（どちらがより悲惨か）と議論することに、それほど意味はないだろう。いわば「どっちもどっち」なのだから。「オールド・ホームレス」にせよ、「ニュー・ホームレス」にせよ、それぞれの背後には「極度の貧困」が見られるのであって、それが“familyless”や“shelterless”という現象を引き起こしていることを認識することこそが重要である。

＜ホームレス問題＞－「オールド・ホームレス」の“familyless”問題と「ニュー・ホームレス」の“shelterless”問題を包括するものとしての－とは、これまで、まず何よりも「貧困問題」であったし、そのことは現在も変わらないのである。

注

- (1) 『ホーボー・ニュース』とは、セント・ルイスで発行されていた、16 ページの新聞（月刊）。定価 16 セント。ホーボー向けの種々の啓蒙的な記事をはじめ、読者が投稿した詩や手紙を載せていた [Anderson, 1923, p. 192]。
- (2) E. H. Monkkonen の推計によれば、19 世紀末のアメリカで、仕事を求めて放浪していた人々の数は、全人口の 10% から 20% を占めた [Monkkonen, 1984, p. 8]。

文献

- Anderson, Nels 1923 : *The Hobo: The Sociology of the Homeless Men* ; Chicago: The University of Chicago Press. 広田康生訳『ホーボー－ホームレスの人たちの社会学』上・下、ハーベスト社、1999 年・2000 年。
- Anderson, Nels 1975 : *The American Hobo: An Autobiography*; Leiden: E.J.Brill. Depastino, Tod 2003 : *Citizen Hobo: How A Century of Homelessness Shaped America*; Chicago: The University of Chicago Press.
- 平川茂 2003 : 「ホームレス生活者の歴史と現在」小玉徹・中村健吾・都留民子・平川茂編著『欧米のホームレス政策（上）－実態と政策－』法律文化社。
- Hoch, Charles and Robert A. Slayton 1989 : *New Homeless and Old: Community and the Skid Row Hotel*; Philadelphia: Temple University Press.
- Kusmer, Kenneth, L 2002 : *Down and Out, on the Road: The Homeless in American History*; Oxford: Oxford University Press.
- Monkkonen, Eric, H 1984 : “Introduction” in: Eric H. Monkkonen (ed.) , *Walking to Work : Tramps in America, 1790-1935*; Lincoln: University of Nebraska Press.
- Rossi, Peter, H 1989 : *Down and Out in America: The Origins of Homelessness*; Chicago: The University of Chicago Press.
- Shinn Marybeth and Sean N. Fischer 2004 : “Research on Homelessness: Overview” in: David Levinson (ed.) ,

平 川 茂

Encyclopedia of Homelessness, Volume 2 ; Thousand Oaks: Sage Publication.

Solenger Alice 1911 : *One Thousand Homeless Men: A Study of Original Records*; New York: Charities Publication.

“Homeless Men” in Chicago : From the Early 1900s to the 1920s

Who are the “homeless”? In both Japan and America, they are “people who are sleeping in public places such as parks, riversides, railroad stations, or in cardboard boxes on the roads.” By the 1970s in America, however, “homeless men” were not sleeping in public places. In this paper, I examined the following two books: A. Solenberger’s *One Thousand Homeless Men* (published in 1911) and N. Anderson’s *The Hobo* (1923). In Chicago from the early 1900s to the 1920s, “homeless men” were “single men who lived in cheap lodging houses in congested areas.” These “homeless men” included four types of unattached men : “hoboes”, “tramps”, “home guards”, and “bums.” Hoboes were “migratory casual laborers.” Tramps were “people who wandered but worked little.” Home guards were “stationary casual workers.” Bums were “people who were wholly or partially dependent.” The hoboes, tramps, and home guards could live in cheap lodging houses. The bums were compelled to live on the streets. But the bums were regarded with indifference, because they were in the minority. People regarded the men who lived in cheap lodging houses (hoboes, tramps, and home guards) as the “problems.” In those days, “homeless men” were not people who slept in public places but the single men who lived in cheap lodging houses.

Keyword : hobohemia, hobo, tramp, home guard, bum